豚の幸せ

子供達に『ブー』と名づけられたそいつは、
当時の豚としては極めて幸せだった。
台風で落果した梨やら
薩摩芋から澱粉を搾り取った後のカスを主食としていた
農家の豚と違って、
『ブー』は給食の残飯を食した。
パンのかけらやら大豆のケチャップ煮、
何よりも大量のアメリカ産脱脂粉乳をたらふく飲めた。

ある日、二年一組の配膳係が給食の食缶をひっくり返し、
廊下に五十二個のミンチコロッケが散乱した。
「ションナイノウ」と担任の先生が両手で拾い集めた。
「どうするんケ？」と見上げる子供らに、先生は校庭の豚
舎のある方角をあごでしゃくった。
「『ブー』の餌に決まっとるべエ」

四十六個のミンチコロッケを平らげて、『ブー』が死んだ
のはそれから数日後だった。
獣医が診察してこう言った。
「塩分や脂の摂り過ぎじゃネエ」

『ブー』は解体されて、その肉は三日間にわたって給食の
食材となり、
舌鼓を打つ子供らを眺めて、軍隊帰りの丸坊主の代用教
員は満足げに笑った。
「幸せな豚じゃ。でっけく太ってよ。ジャングルで『ワシ
ヲ食ベテクレ』と言って死んだ戦友もいるが、やせ細って
骨皮だった」